華やかに新春ギャラリー展

感動の東京五輪　思い出話も

鎌倉市文化協会主催の第36回新春ギャラリー展が1月7日から13日まで鎌倉芸術館で開かれ、約1200人の来場者があった。

協会から鎌倉彫教授会のオブジェや皿、鎌倉書道協会の新年を寿ぐ書、鎌倉写真連盟は連盟展の入賞作品を並べた。鎌倉美術連盟会員の洋画や日本画も新春にふさわしい作品が多く、鎌倉在住の文人画家・西松凌波さんは「令和に因みて」の墨彩絵を出展した。

今回初めて市民から作品を募ったところ、漢詩や連句の書や絵画など多くの作品が寄せられた。出展者からも「発表の場ができてうれしい」と喜んでもらえたという。

オリンピック年に因んで1964年の東京五輪当時の鎌倉の写真（鎌倉中央図書館提供）、聖火リレーコースが掲載された当時の「広報かまくら」臨時号の記事の紹介もあった。

11日は、東京都庁の元職員で東京五輪組織委員を務めた岡部武雄さん（鎌倉在住・83歳）が、手作りの展示ケースに入れたオリンピックの記念メダルや、選手・関係者ワッペン、ネクタイピンなどを見せながら、当時のエピソードを語った＝写真。

大会の運営とスペイン選手の世話係を担当した岡部さんは、開会式の入場行進で、会場に入る前に選手からヒョイと肩車されて「早くおろしてほしい」と気が気でなかったこと、お別れパーティー終了後、バスを停めてスペイン選手団長が岡部さんに駆け寄り、つけていた選手団バッジを岡部さんの胸につけてくれたことはほんとうにうれしかったこと、都庁の同僚からはいつもうらやましがられていたことなどを語り、当時を振り返り、「大変だったが、やってよかったと思う」と感動を伝えた。

中学生が一日税務署長

税についての作文受賞者

鎌倉税務署で昨年12月19日、「一日税務署長」の催しが行われ、令和元年度の中学生の「税についての作文」受賞者3人が税務署長を務めた＝写真。

この作文募集は、国税庁が全国納税貯蓄組合連合会との共催で行っていて、昨年は全国で57万8千204編、（鎌倉税務署管内1千411編）の応募があり、国税庁長官賞は、全国で40人、東京税務署管内で7人が受賞した。

国税庁長官賞の中島咲季さん（鎌倉市立第一中3）、鎌倉税務署長賞の橋本明日香さん（横浜国大附属鎌倉中3）・藤本ゆずさん（葉山町立南郷中3）の3人は各々金子剛税務署長から委嘱状と「一日税務署長」のタスキ、名刺を受け取ると、署長席に座り、部下からの書類にはんこをついて決裁をしたり、関係者と名刺交換したりした。同署の職員が集合したホールで受賞作品を朗読した後、署内を視察し、説明を聞いた。

この日の感想を、税が健康を支えてくれていることを作文に書いた中島さんは、「税金が生活に密着していることがよくわかった」と述べた。

中国にいても日本と同じ教育が受けられたことで税の恩恵を受けたことを書いた橋本さんは「多くの人が仕事をして税金の制度が成り立っていることを実感した」。

未来をつくる税金として役立っていることを作文で伝えた藤本さんは、「初めてのことばかりで、貴重な体験をさせてもらってよかった」と述べた。

江ノ電・湘南モノレールとコラボ

赤い羽根共同募金

共同募金会鎌倉市支会（鎌倉市社協）と藤沢市支会（藤沢市社協）で協働して企画している「江ノ電×赤い羽根共同募金」のコラボ活動が1月11日、片瀬江ノ島の「スバナ通り自治会館」で行われた＝写真。

6年目となる今年は湘南モノレール（鎌倉市）も活動に加わり「江ノ電&湘南モノレール×赤い羽根共同募金」として新たなスタートを切った。

鎌倉市からはNPO法人「笑ん座カフェ」の利用者たちが、藤沢市からは湘南白百合学園の中高生が募金協力を呼びかけた。マスコットの「えのん」や「しょもたん」も参加し、寄付をされた方にオリジナル缶バッジを渡し、共同募金をアピールした。

集まった募金は、江ノ島電鉄、湘南モノレール沿線に所在する児童・障がい者・高齢者を支援する民間の社会福祉施設をはじめ、鎌倉・藤沢市内の地域福祉を推進する活動のために活用するという。

個性ある店づくりを

鎌倉市商連新年会

鎌倉市商店街連合会（高橋令和会長）の新春講演会と新年会が1月9日、市内のホテルで開かれた＝写真。

講演会では、フリーアナウンサーの村松加壬里さんが「おもてなしの心を伝える話し方と伝え方」の題で講演。身だしなみやマナー、第一印象が肝心なことを話し、隣りの席に座った人同士で会話させたり、滑舌をよくするための早口言葉をいっしょに読み上げたりして、ことばの持つ力を説いた。

新年会では高橋会長が「29団体会員約1900人の当商店街連合会は、各地域で個性ある店づくりを展開してお客様に満足していただき、まちの活性化につなげたい」と協力を呼びかけた。

―――

おわび　1月1日付2面の記事で鎌倉女子大学短期大学部の小泉裕子学長となっていたのは学部長の誤りでした。おわびして訂正します。

文学つれづれ ⑱⓪

吉川英治『宮本武蔵』（七）

赤羽根龍夫

伝七郎を倒した吉川武蔵は何事もなかったように遊郭に戻り、裏口から座敷に入る。

遊郭には沢庵和尚も来ていた。その席に遊郭随一と評判の吉野太夫が姿を現し雅な遊興の後、皆を遊郭の離れにある自分の部屋に招いた。

ここから『宮本武蔵』随一の名場面「牡丹を焚く」となる。勿論創作であるが、文学的香りの深い章となっている。

次のように始まる。

浅黄無地の着物に、黒じゅすの帯をしめ、髪もつつましやかな女房髷に結い直し、薄型化粧して、吉野は客を迎い入れた。

囲炉裏には雪の夜の馳走は火に勝るものはないとして、牡丹の古株を焚いていた。自分の隣に武蔵を招いた太夫は武蔵の袂に着いた決闘の時に付いた血を、緋牡丹の一片がついているかのように懐紙でそっと拭いた。沢庵は求められるままに歌を書いた。

色香なき身をばなにかは惜まじ
をしむ花さへ
ちりてゆくよに

吉野太夫は、

咲きつつも　何やら花のさびしきは　散りなん後を　おもふ心か

45年前、一条寺下り松付近で筆者

とどろえて、

武蔵さま。貴方は、ここへお泊りなさいませ、なんとのう、今夜はお帰し申しとうございませぬ。

光悦を始め皆は「日本随一の果報者よ」とはやしたが、吉野太夫は遊郭の外で吉岡の門人たちが武蔵を殺めようと待ち構えていることを知っていたのである。

こうして二人きりの夜となるが武蔵は、緊張で身を固くして座っているばかりであった。

吉野太夫は武蔵に静かに語りかける。

あなたはそうやって、誰に備えているのですか。…あなたは今にも斬られて死ぬ人のように見えてならないのです。

武蔵は吉野太夫に、臆病な心を笑われたと感じ、「吉野どの、この武蔵を未熟者だと笑うたな」と怒りを露わにする。

吉野太夫は先ほど客の前で弾いていた琵琶を引き寄せ、惜しげもなくナタで縦に割ってしまった。自分が一刀のもとに切られたと感じた武蔵に吉野太夫は静かに語りかける。

この通り、琵琶の中は空虚も同じでございましょうが、では、あの種々な音の変化はどこから起るのかと思いますと、この洞の中に架してある横木ひとつでございまする。

そう言って太夫は琵琶の空洞の中にわたしてある横木の緩みの構造を説明する。

武蔵の心にはその緩みがなく張り詰めているので、今にも裂けてしまうよう見えると云う。

白い木屑と断れた四絃の残骸を見つめたまま、武蔵は、鶏の声も耳に覚えなかった。…

吉野は、夜明けを惜しむように炉の火へ焚木を足そうとしたが、牡丹の木はもうなかった。

武蔵は吉原に迷惑のかからないように、正面の門から出ていく。

今にも切りかからんとする門人に、武蔵は遊郭の門前で騒ぎが起こらないように、後日の一門との決闘を約束する。こうして一条寺下り松での第三の決闘となる。

「小倉碑文」では吉岡一門との決闘の場は「洛外下り松」とはっきりと書いてある。比叡山入り口である雲母坂の近くの山の裾に広がる地帯である。ここに吉岡方が、復讐のために数百人集まったのである。

私が武蔵の研究を始めた45年前には何代目かの松と「宮本・吉岡　決闘の地」の碑が建つ小山から比叡山の麓の山並みを目にすることが出来た。

しかし昨年取材で訪れた際は住宅が広がり比叡山の山裾は見ることは出来なかった。

（神奈川歯科大名誉教授）

鎌倉朝日歌壇

香山　静子　選

羽子板も独楽もスマホに呑み込まれ不気味な静寂路地裏の春　片瀬　中村　喬

現代の世相に目を向けた鋭さがある。

カナリアのこゑきこゆるか温暖化の地球の酸素消滅の日に　辻堂　柳　蒼柳

温暖化への不安感にカナリアは効果的。

三が日の規制も解けて大型の観光バス行く「いざ鎌倉」へ　大船　小笹岐美子

三が日が過ぎて日常に戻った状況にほっとした作者。

新年の挨拶マスク越しにして眼の表情に気持読みとる　逗子市　湊　美根子

気がつきにくい瞬間を切り取っている。

紅白の干支のスポンジ使い初め今年の幸の始まる元旦　扇ガ谷　鈴木　久子

外つ国の仕事に励む息子の一声「雑煮食べたし明日帰国す」　藤沢市　一色千穂子

これだけは人にゆずれぬ思いありまかれた歌留多目で追いながら　藤沢市　青木寿美子

せせらぎに沿ふ径歩めば忙しげに背黒鶺鴒吾を先導す　今泉台　下田　和夫

晦日に蜜柑届けば湘南の潮の香匂ふ故里の味　葉山町　近藤　純

モーツァルトの弦つややかに真夜中の静寂に響くはや春に入る　材木座　有野裕美子

めでたしや母・娘・初孫子年にて干支の夜明けの平らかなれと　葉山町　近藤美知子

鎌倉朝日俳壇

星野　高士　選

〈天〉鎌倉に遊びしことも初むかし　片瀬　國安　佳子

鎌倉に遊んだことをしみじみと思い出す作者に同感。

〈地〉持ち寄りて直ぐの昼餉や女正月　藤沢市　一色千穂子

上五中七はいかにも女性同士の素早さが感じられた。

〈人〉見渡せばモノレールより初日の出　岡本　森田　孝

初日の出の尚一層の景色も伝わってくる一句。

みかんむく唯それだけのことなのに　藤沢市　青木寿美子

日常の中の平和な時間をこの季題でうまく伝えた。

山眠りすべての色は沈みけり　笹田　上田　満喜

冬山は山が眠る如くに静かだ。すべての色は山のみではなくその背景も入っている広い一句。

冬晴や木立の先の白き富士　腰越　松原　薫

この作品は白き富士で冬晴れが動かない。

人間の鬼が怖いと鬼逃げる　笹目町　出蔵かおる

ラジオ聞くなつかしの歌クリスマスソング　今泉　植木　風見　玲子

落椿天に向ひて黙深し　小林刀羊子

大晦日去年の厄消す寺の鐘　葉山町　近藤　純

雨おとに身ぬち潤ふ薺粥　逗子市　塩谷あい子

賀状来るいつも思ひをこまやかに　逗子市　佐藤　信子

生きている生かされていて七草粥　城廻　増田　重雄

廃屋のひさしを隠す雪のかさ　岡本　鳴海　紀政

鳥総松いざ新しきスニーカー　本鶴沼　森田　順子

優しさを持ちより待つやクリスマス　川名　槇野あさ子

咲きつぐて白梅夜気を領しおり　藤沢市　春山　多喜

数え日の未だ馴染まぬ令和かな　城廻　小美野京子

冬晴のきれいな空だじっと見る　扇ガ谷　有賀　要

オリパラのメディアの走る年の明け　腰越　小河　哲美